

第 2 0 号

発行所 大阪市史跡 龍溪禅師墓所
靈 亀 山 九 島 禅 院
〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
TEL 06(583)2725 FAX 06(583)0908
発行人 住 職 奥 田 啓 知 (智 證)

横山やすしさん死去

戒は身をたすける

稀代の漫才師「横山やすし」さんが死去しました。死因はアルコール性肝硬変でした。天才漫才師の名を欲しいままにし、「やす・きよ」漫才の復活を果たせず鬼籍に入ってしまった。

やすしさんは、「破滅型の最後の芸人」とも言われ、酒にまつわる数々の騒動を巻き起こしました。

追悼番組のなかで長男木村一八さんが、「毒舌なやんちゃなやっさんを演じる父には酒が必要だった」と述べていました。必要で飲んだ酒にいつしか溺れ事件に巻き込まれ脳挫傷の重症を負い、再起を果たせず寂しい死でした。

仏教では、酒は不飲酒戒といつて、五戒の一つに数えています。五戒とは、仏教徒が守るべき戒めですが、

- 一 不殺生戒（殺すな）
- 二 不偷盜戒（盗むな）
- 三 不妄語戒（嘘つくな）
- 四 不邪淫戒（淫らなセックスをするな）

五 不飲酒戒（酒を飲むな）
この五つを戒めとしています。よく見てみると、これらは守れそうにないことが判ります。人は生き物を殺さずには生きていけません。ガン患者に対して真実を隠すこともありま。

守れないような戒を作ったのでしょうか。極端な言い方をすると「破るために戒めがある」のです。私たち凡夫は、戒めを完全に守ることはできません。どうしても破戒せざるを得ません。破戒はやむを得ないので、だから、破戒をせざるを得ない自分を反省するのです。仏教では、その反省を「懺悔（さんげ）」と言います。懺悔文の中に

我昔所造諸悪業
皆由無始貪瞋痴
從身口意之所生
一切我今皆懺悔
（私たちが昔から造った様々な悪い行いは、すべて始めのない遠い過去からの貪（むさぼり）瞋（いかり）痴（おろかさ）から生じています。そのため身体と言葉と心から生じるすべての



伝説の漫才「やす・きよ」、文句なし、能書きなしにおもろかった＝1977年、ナンパ花月

行為を、私たちは、今懺悔（さんげ）します）
この懺悔です。自分の犯した罪を反省し、仏の御前にそれを告白して赦しを乞うのです。私たちがそのような懺悔をするために戒めがあるのだと思います。戒めを破り懺悔せざるを得ない自分、まわりに迷惑をかける、自ら懺悔し、まわりの人や生き物に感謝するのです。

「酒は飲んでも、飲まれてはいけない」とは、よく言われることですが、この不飲酒戒の精神、懺悔し感謝しながらお酒を飲んでおれば、やっさんも、あれほど望んでいた「やす・きよ漫才」の復活を果たせたのではないかと残念に思えてなりません。しかし、そんなやっさんだからこそ、きまじめで誠実な芸風のきよしさんとの絶妙のコンビができたのでは。破滅型の芸人の宿命かも知れません。天才漫才師横山やすしさんのご冥福をお祈りいたします。

阪神淡路大震災により亡くなられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表しますとともに

震災復興祈禱法要

有馬温泉に「希望の灯火」

一月十七日は、あのいまわしい阪神淡路大震災から一年がたち、被災地では種々の慰霊行事が行われました。仏教各派も、宗派をこえて各種の慰霊法要がとり行われました。私も黄檗宗でも、青年僧の会が主体となり、被災寺院でもある有馬温泉の温泉寺で「希望の灯」と題する法要が、平成八年一月十八日午後七時三十分より厳修され、小柄も出席させていただきました。

温泉寺は、有馬温泉の中心に位置し、巨大な薬師如来を安置する黄檗寺院で、当院とも縁があり、先々代住職大野一道和尚は当院第二十三代宗和和尚とは兄弟弟子で、終戦まで当院の役僧を勤めていたまきました。古いお檀家さんには、お酒飲みの有馬の和尚さんで親しまれております。戦前には、当院檀家の肝入りで寮舎が寄進され、交代で避暑に行かれたと伝わっています。

す。現住の重頭和尚は一道和尚のお孫さんですが、かの震災のあと、住職を退かれ、現在は特命住職の三田の大舟寺浅野蓬俊和尚が、寺務を代行されています。

震災では、ご本尊のお薬師さんの御頭が転げ落ち、天井や瓦はずれ、惨憺たる有り様でしたが、現在は、いちおう見た目ではなんとか復旧している状態でした。

「希望の灯」とは、温泉寺の界隈に一千本のお灯明を祀って、多くの犠牲者の御霊の鎮魂と一日も早い復興を願う大般若転読祈願法要を執り行い、この法要がそれこそ希望の灯火になりますようにとの願いを込めたものです。

当日は大本山萬福寺より黄檗宗管長 林文照猊下が拈香師となり、宗務総長 乾隆俊禅師をはじめ全国から三十数名の和尚さま方が随喜され、厳寒の本堂に裂帛の気迫で大般若経六百巻が転読されました。



大般若の転読とは、「修正会」ともいい、いろいろな過ちを懺悔修正し、心新たに正しい道にむかって進むことを誓う法要です。

また法要に先立ち、サントリのウーロン茶のコマーシャルの「ラストエンピラー」氏の「ラストトラック」にも出演された姜小青（ジャン・シャオチン）女史が中国胡弓で演奏されました。当日は特に冷え込みが強く、弦の調子を保つために二部演奏となり、中国胡弓の繊細な調べに、参詣の温泉客や関係者は一同、しばし幻想の境地に酔い、被災地の完全復興が一日も早く実現しますように、お祈り致します。

阪神淡路大震災により亡くなられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表しますとともに

特別展示「唐様の書」展

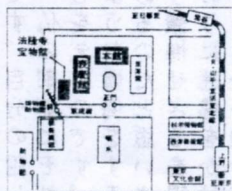
黄檗山所蔵の重要文化財・額字原書など多数出陳されています。

○日時：2月 7日～

3月20日

○場所：東京国立博物館

○入場料： 400円



江戸時代初期の黄檗の唐様書風が和洋書風に影響を与え、展開していった。

山 門 会

(彼岸会法要)

ご案内

3月23日(土)
午後1時半より
ご先祖供養です。宗旨に関係ありません。ご回向の申し込みをお願いします。

法 話 ・ 住 職



檀信徒の皆さまへ

○弘忠和尚一周忌厳修

さる一月二十七日(土)午
前十一時半より、先代住職弘
忠和尚の一周忌法要を執り行

いたしました。
当日は、教区支院長さまや
法類寺院かた十四名のご僧侶
親戚衆、檀家総代さまのご出
席をえて、快晴のもと無事円

被災された皆様からお見舞いを申し上げます

成する事が出来ました。
弊師遷化(昨年二月三日)
のあと、あつと言う間の一年
でした。津送(葬儀告別式)
の日の寒かったこと、裸足で
のお拝、大勢の参拝者等々、
無我夢中の五日間でした。そ
の後、建碑式納骨法要、常
休寺山門復興工事や当院本堂
の復旧工事と多忙な一年でし
た。

復旧なり綺麗な本堂での法
要に、さぞ弘忠和尚もお喜び
のことと存じます。お檀家さ
ま方にご案内を致すのが筋で
すが、場所柄ご遠慮申し上げ
総代さまを代表にご焼香を頂
きました。

○襖 絵 制 作

本堂の大座敷、小座敷に襖
絵の制作を依頼しています。
大座敷には水墨画で山水を、
また小座敷には、花鳥画を描
いて頂くことになりました。

制作は、中国画家の劉
新華先生です。先生は中国美
術家協会会員で、中国天津大
学芸術研究所講師をされ、現
在は京都芸術大学に留学し研
鑽を積まれています。神戸の
御影で被災され、淀川区の仮
設住宅にお住まいで、東三国
の自敬寺さまのご紹介でお願
いしました。
春には完成していることだ

なんでも 質 問 箱

(問い) 故郷の墓を移してもよいでしょうか。

(答え) お墓参りが
一年に四回(盆・
暮・彼岸)はむず
かしい距離であつ
たり、ご自分が分
家で自分の子孫を
含めて、再び故郷
に帰住する可能性
が考えられなかつたり、故郷に身
寄りがいない場合には移転しても
かまわないと思います。お墓に象
徴されるわが家の歴史が、その移
転を契機として更に、大きく発展
できる見通しなら、ご先祖もきつ
と子孫の繁栄を喜んで下さるでし
ょう。何年も放置されるよりは結
構なことです。ただ、移転する際

には、それまでご先祖をお祀り
して下さったお寺や村の方々に
感謝の気持ちを表し、去りがた
い思いをご先祖が残されぬよう
充分ご供養をし、更にご自分の
家の歴史の保持に留意配慮され
ることが必要です。
お墓は死者の霊を弔うためや
記念とか報恩のための標識であ
るばかりでなく、生きている者
の修養に役立つものでもあるは
ずですので、伝統の信仰を尊重
することも大切ですよ。
せっかくお墓を移しても、そ
の時だけ盛大にお参りをし、後
は知らぬ顔では、ご先祖もさぞ
ご立腹されていることでしょう

○中国祖山拝塔の旅延期

中国福建省にある祖山、黄
檗山萬福寺への団体参拝が延
期となりました。
これは、宗祖隠元禪師のお
られた中国の萬福寺が現在、
再建工事中でその完成を祝し
日本黄檗宗から使節団が派遣
される予定でした。

当院からも、檀信徒の方々
に呼びかけ、参加者を募ろう
と考え、法要の席でお話もし
ていましたが、さきの震災で
被災した宗内の寺院の復興募
財その他、緊急事項ができた
ので、とりあえず本年は中止
と本山より通達があったため
です。



奉 納 抄

南無観世音菩薩のぼり奉納

(平成八年一月)

山口時夫・山口春江・一柳胤雄・木村仁志・三好シゲ子・岩倉一男・片岡幸子・鈴木康司・三阪忠秋・佐藤昭子・和田高明・藤川忠計・加島好雄・赤松すま子・和田寿恵・浅香弘一・松田勝水野栄子(締め切りとさせて頂きます一年間、境内に掲げさせて頂きます)

編集後記

▼当院檀家の藤原利一氏(ペンネーム藤原伊織)が、江戸川乱歩賞につづいて、「テロリストのパラソル」(講談社刊)で今年度の直木賞を受賞されました。▼直木賞の発表の日は、お父君の命日の日で、お月参りに出掛ける間際、家内より新聞に載っていると知らされま

した。誠にめでとうございます。▼弊師弘忠和尚の一周忌も、修繕改装なった本堂で、大勢のご寺院方にご回向していただきました。檀信徒の皆様代表として総代方にご焼香を手向けて頂きました。▼私たちが今ここにこうして元気に生かされておりますのは、すべてご先祖のご加護の賜物と感謝して、少しでも世の中のお役にたつよう精進しましょう。▼衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願断 法門無量誓願学 佛道無上誓願成!

献 体

新年早々、お葬儀のことで故人はおばあさんと共に、生前に献体の申し込みをされていました。

献体とは、医学の発展の為に、死後自己の身体を大学病院など研究機関に無償で提供することです。大家内の母方の祖父も享年九十四歳でしたが、死後献体したそうです。住職就任以来数多くのお葬儀を担当しましたが、はじめての経験でした。

臓器移植については、いろいろと議論のわかれるところ。延命医療のためには、新鮮な臓器が必須であり、脳死の段階での摘出手術がしばしば問題となり、今日まだ結論がでていません。小誌創刊号で述べたように、人工呼吸器で生かされている脳死患者からの臓器摘出は仏教的には反対です。

それはともかく、死後(心臓死)あとに遺った身体が役に立つのなら使っていただくことは、何ら問題はありません。しかし、ご遺族のお気持ちとしてはなかなか割り切れないものがあるのも事実でしょう。

お通夜の席で読経のあと、お釈迦さまも前世には飢えた虎を助けるために身を投じたお話をさせていただき「なかなかできることではありません、これをしめくくりました。

式当日は寒い日、出棺にあたって、お孫さんがお別れのことばを述べました。「医学の発展のために自分の身体を役立ててもらいたい」とのおばあさんの日記の一節が披露され、最後に涙声ながら「こんなおばあちゃんを持てて最高の誇りです」と結びました。参列者一同、深い感動を覚えました。ご遺体を乗せた寝台車の見送り、斎場への別れとはことなり、寂しさもひとしおでした。



被災された皆様には心からお見舞いを申し上げます

— 坐禅しましょう! 法話だけでも如何ですか —

ご 案 内

円 通 宗 統 禅 会

毎月 18日(本年より変更) 午後 6時半 ~ 8時半

場 所 当院本堂と坐禅堂
坐禅指導 黄檗山萬松院奥田仁芳老師
提 唱 龍溪禪師「宗統録」